

第2回 橋本市立高野口中学校移転改築検討委員会 会議録（要約）

1. 日時・場所

- ・ 日時： 2026 年 7 月 14 日（火） 19:00～21:10
- ・ 場所： 橋本市教育文化会館 3 階 第 1 研修室

2. 出席者

二宮委員長、木村副委員長、廣岡委員、北澤委員、松本委員、森本委員、岡本委員、花岡委員、井澤委員、村上委員、前田委員、北浦委員、向委員、入山委員、福本委員、岸田委員、久保委員、丸山委員、東川委員

【出席委員 19 名 欠席者無】

事務局： 橋本市教育委員会 今田教育長

教育委員会事務局 岡教育部長、阪口参事

丸山教育総務課長、裏川教育総務課長補佐、森田教育総務課長補佐、
増谷施設係長

（株）東畑建築事務所：花村、神谷、まちラボ(有)加藤

【傍聴者 2 名】

3. 次第

1. 開会
2. 委員長あいさつ
3. 第1回検討委員会のふりかえりと成果共有
4. 先進事例紹介
5. 基本コンセプト・整備方針素案の説明
6. 協議事項
7. まとめ・連絡事項・閉会

資料

- ・ 資料 1 ～資料 7
- ・ ニュースレター
- ・ 地域ワークショップチラシ

4. 議事概要

(1) 前回のふりかえりと成果報告

設計チームより、第1回検討委員会および学校・地域で実施された第1回ワークショップ（WS）の成果が報告されました。

- ・ 高野口らしさを表す5つのキーワード：「自然が豊か」「人と人とのつながり」「地域と共に育つ」「歴史」「地場産業」が抽出されました。
- ・ WSでの意見：現校舎の良い点として「自然環境」「中庭による見通しの良さ」が挙がる一方、課題として「設備の老朽化」「坂道のきつさ」「冬の寒さ」などが指摘されました。

(2) 先進事例の紹介

新しい時代の学びを実現する施設例として、以下の事例が紹介されました。

- ・ 学習空間：多様な学習スタイルに対応するオープン・スペースや、図書室を廊下全体に広げたメディアセンター。
- ・ 地域連携：学校の家庭科室や音楽室を、放課後に地域のキッチンやスタジオとして開放する事例。

(3) 基本コンセプトおよび整備方針素案の提示

事務局より、WSの意見を反映した3つのコンセプト案と4つの整備方針が示されました。

- ・ 基本コンセプト案：
 - 案1：世代を超えてのびのびと学び合える未来創造の学校。
 - 案2：自然・歴史を縦系、子供・地域を横系に未来を織りなす、世界に誇れる学校（地場産業のパイル織物をイメージ）。
 - 案3：みんなが熱い想いをもって集える、みんなでつくる、みんなの学校。
- ・ 整備方針の4つの視点：「学び（主体的に学ぶ）」「生活（健やかに過ごす）」「地域（地域と育つ）」「安全・環境（未来へつなぐ）」。

(4) 協議事項（グループ別協議）

委員が6グループに分かれ、示された素案について議論が行われました。主な意見は以下の通りです。

各グループの発表内容

各グループ（A～F）からは、事務局が提示した基本コンセプト案や整備方針に対し、「中学生が主役であること」や「学びの質」を重視する意見が多く出されました。

- グループ A: コンセプト案 3 を支持しつつ、生徒、教師、保護者、地域住民など「みんなが通える学校」というキーワードを提案しました。また、SDGs の観点からも「生徒・教師という人（命）を第一に大事にすること」や「子供の居場所作り」を最優先すべきと発表しました。
- グループ B: 提示された案には「学び」に関する記述が少ないと指摘しました。学力向上への期待は地域や保護者からも強いため、「学びができる学校」を前面に押し出すべきであり、中学校ならではの視点（オープンな空間だけでなく、集中できる個別空間など）が必要だと強調しました。
- グループ C: 「オープンが全てではない」とし、不登校傾向の子やプライバシーを守りたい子が安心できる「居場所を選択できる環境」の重要性を訴えました。具体的には、鍵付きの靴箱や、生徒全体を見守れる職員室の配置、地域と共に歩む姿勢などの提案がありました。
- グループ D: 「主役はあくまで中学生」であり、自然や歴史、地域連携といった要素が先行しすぎて中学生の快適さが度外視されるのは本末転倒であると指摘しました。また、行政用語のような難しい表現ではなく、中学生が自分たちの学校だとイメージできる分かりやすい言葉にするよう求めました。
- グループ E: 案 2 をベースに、「子供を主軸」に据え直すべきだと発表しました。これからの時代に求められる学びとして、主体性だけでなく「探究的な学び（自ら興味を持って調べること）」を方針に入れるべきとの意見が出ました。一方で、地域との繋がりが強すぎると転入者が疎外感を感じる懸念も示されました。
- グループ F: 案 2 と 3 を掛け合わせ、生徒自身が「自分たちの学校はこんな学校だ」と具体的にイメージし、答えられるようなコンセプトが望ましいとしました。また、前回の会議でも出た「多様性の包摂（インクルーシブ）」をより明確に打ち出すべきだと述べました。

二宮委員長の見解と総括

各グループの発表を受け、二宮委員長（および議長としてのまとめ）は以下の視点を示しました。

- 生徒・教師を第一に：コンセプトにおいて、学校が誰のためのものかを再確認し、「生徒と教師が主役であること」をより鮮明に打ち出す必要があると述べました。
- 中学校としての発達段階への配慮：中学校は小学校とは異なり、仲間と共に過ごすことや、自意識の芽生えに伴うプライバシーの確保、個別性の尊重が重要になります。これらを踏まえた「居場所」の設計が必要だと述べました。
- 学びの方向性：主体的な学びに加え、「将来のキャリアにつながる学び」や「探究的な学び」といった、中学校ならではの学びの入り口を保証する視点を評価しました。
- インクルーシブ（多様性の包摂）：英国の事例を引き合いに出し、階段があるだけで車椅子の生徒や教師を排除してしまうという考え方を紹介しました。日本においても、単なるバリアフリーを超えた「多様な人々を最初から受け入れる設計」をより深く考えていくべきだと示唆しました。
- 地域との関わり方の明確化：地域が学校を「支える」のか、地域の人々が「集う」のか、あるいは「共に」活動するのか、その関わり方の定義をより明確にする必要があるとの考えを示しました。
- コンセプトのブラッシュアップ：多くの要素を盛り込みすぎて本来の大切な部分が埋没しないよう、本日の意見を反映させてシンプルかつ心に響く内容に修正していくことを約束しました。

次回予定：

- 第3回検討委員会：2026年8月17日（月）19:00～